

20250217 「よりよく考え、『わかる』『できる』を実感できる子の育成
～学びが深まる問題解決型の授業づくりを通して～
鈴木小の研究発表会に参加して（1）

先週金曜日に、鈴木小学校の研究発表会に参加させていただきました。算数の発表ということで、ずっと楽しみにわくわくしていました。昨年秋にシンポジウム登壇のご依頼をいただき、話の流れの中で小平市算数部のアピールまでさせていただくことができました。参加された本校の先生方、その後を支えてくださった先生方、本当にお疲れ様でした。ありがとうございました。

鈴木小の研究テーマは、
「よりよく考え、『わかる』『できる』を実感できる子の育成
～学びが深まる問題解決型の授業づくりを通して～
でした。

主題に示されているように、算数は「わかる・わからない」「できる・できない」がはっきりしている科目と言えるかもしれません。その「わかる」「できる」を達成する上で、多分一番確実に効率がよいのは、実は「教えこむ」ことなのではないでしょうか。「わかる」ために教師や分かった子が、スモールステップで図や操作を駆使して、懇切丁寧に解説する授業です。その内容が一部の子だけでなく、多くの子にとって有用であれば、個別でなく集団に対して実に効率的・効果的です。それを「講義型」とよんでも差支えないだろうと思います。教師や友達の解説を聞いて「なるほど！」「そうか！」と納得が広がる授業のイメージは、むしろ授業の理想といってもいいかもしれません。

しかし、鈴木小の研究は「講義型の授業の充実」とはいわず、「学びが深まる問題解決型の授業」と謳っています。前者と後者とではどこが違うのでしょうか。違ふとしたら鈴木小が後者を採った理由は何だったのでしょうか。それを探るために、鈴木小学校の提唱してくれた「鈴木小 問題解決ロード」を見てみましょう。

「問題解決ロード」のスタートは、「問題・めあて」です。そこには、こんなこどものつぶやきが書かれています。

「今日はどんな問題だろう」

「今までと何が違うだろう」

授業の始めにおいて、すでにこどもの心は期待感に満ちています。そして、既習と関係づけて問題を捉えていこうという態度が育っています。

次は、「自力解決」です。こんなつぶやきが書かれています。

「自分でできた！友達に伝えよう！もっと考えよう！」

「うまくできない、ヒントが欲しい、友達と相談したい」

ここでは、自分の力で解決をすすめることを目指しつつ、教師や友達と協働的に考えることで解決の糸口を見出そうとする姿も書かれています。そして、解決がすんでしまっても、別の解決方法はないか、さらに追究する姿勢のイメージも示されています。

そして「全体で解決」です。

その後「ふり返り・まとめ」を行って、

最後に「適用問題」に取り組みます。

さて、「講義型」と「問題解決型」の違いは、何だったのでしょうか。どちらも最後は「全員がわかる・できる」にたどり着くことを目指すとはいえ、鈴木小が問題解決型授業でねらったのは、「自分の頭で考える」こと、主体的に問題解決に取り組もうとする意志と力を育むことだということが、「問題解決ロード」から伝わってきました。問題を解決する力は、問題解決に挑むことで培うという考え方です。

それに対して、解決方法やものの見方、スキルや技能をはじめに教えて使えるようにしておいて、それを適用問題で活用させてよさを実感させ、定着を図る手法もあるのです。しかし、後者には往々にして必要感より知識やスキルの習得が優先されがちな面があります。やはり、「どうしてだろう？」「なんとか解決したい」「この問題を解きたい」と、こども自身が思いをもって主体的に問題解決に取り組む姿勢があってこそ、スキルを身に付けたいという意欲も喚起でき、結果的によりよくスキルが身に付くことが期待できると考えます。さらに、問題に対して夢中に考える中に、「そう考えればいいのか」「そこに目を付ければいいんだね」「その考えは便利だな」と、ものの見方や考え方のよさをこども自身が実感し、学びを自分のものにしていこうとする「学びに向かう人間性」も養われていくのではないのでしょうか。

「わかる」「できる」ことはもちろん大切ですが、実は、その過程で身に付けられる「学びに向かう人間性」こそが、教科の枠を超えてこどもの未来に伸びようとする力となっていくと考えます。蛇足になりますが、だからこそ、小平市算数部は「深い学び」を「こどもが夢中になる学び」とイメージを捉え、こどもの学びに火をつけることにポイントをおいた授業づくりに取り組みました。